

生 *Seikatsu Bunkashi* 史

生活文化史

<史料館だより>

目 次

- ◇ 深江物語(1) — 昭和20年代の駅前界隈を歩く — 森口健一 2
- ◇ 東灘区区制六〇周年写真展に協力 大国正美 9
- ◇ 打出焼と精道村尚歯会 藤川祐作 10
- ◇ 神戸深江生活文化史料館が創立三〇周年 11
- ◇ 深江の青年団と夜学会 大国正美 12
- ◇ 史料館入館者七万人達成 13
- ◇ 「史料館だより」の電子公開 高田祐一 13
- ◇ 資料登録カードとデータベースの連携 水口千里 14
 - 兵庫県ヘリテージマネージャー養成講習会での公開 —
- ◇ 資料登録カードのデータベース化 高田祐一 14
- ◇ トライやる・ウィークと史料館 水口千里 15
 - 本庄中学校の生徒を受け入れて —
- ◇ 史料館日誌抄 道谷 卓 16

2011. 3. 31
NO.39

深江駅前、多田ラジオ店の昭和30年代半ばの正月風景。スクーターに注連飾り、店頭には「謹賀新年」の張り紙がある。店の前には初荷で納入された電化製品が山積みされている。1槽式の洗濯機などが人気を集めた。看板にはテレビが描かれている。



神戸深江生活文化史料館

深江物語(1)

昭和20年代の駅前界隈を歩く

深江塾 森 口 健 一

二〇〇九年の深江文化村講演会をきっかけに生まれた深江塾では、地域住民のメンバーが毎月一回史料館に集まって、自らの体験や記憶を語り合い、街並みの記録を作成しています。また実際に町を歩き、痕跡を探し町の変化を見つめなおしています。今回は本庄村が神戸市に合併した昭和二十五年（一九五〇）前後の深江駅南界隈をテーマに、話し合った成果をまとめました。

西国浜街道と新道

昭和二十一年（一九四六）に国道43号線の都市計画決定がなされました。同時に今の深江の道路配置のもとになった復興計画決定もなされました。この復興計画が実施される以前の深江の道は、「新道」と西国浜街道の二本の道が東西に貫いています。

明治四十三年（一九一〇）の地図では、深江を東西に貫く道は西国浜街道が太く描かれているのに対し、新道は細く途中で途切れています。大正十二年（一九二三）の地図では新道は深江と芦屋の境である傍示川で浜街道と南北に分かれ、はつきりした道となります。二つの道は深江を西に向い本庄小学校手前、神戸高等商船学校（後の神戸商船大学、現・神戸大学海事科学部）正門前あたりで再び合流しています。新道は深江地区内の古くからあった道を利用して、新しく幹線道路として造られた道で、浜街道が未舗装だったこの頃に「新道」はアスファルト舗装の道路でした。

牛や馬が荷台を引く車も通行し、西宮の宮水を酒造メーカーに運

んでいました。歩道と車道の分離はなく人も車も馬も混じって通行し、アスファルトの上に馬糞や牛糞が点々と落ちていました。

車と言っても乗用車は殆どなく、オート三輪（通称・パタコ）が目立ちました。昭和二十年代には、町を結ぶ幹線道路としては深江区間に限れば、浜街道ではなく「新道」でした。

昭和十三、四年ごろには神戸高等商船学校正門から国道2号線へ直線の幹線道路が出来ました。

大日神社と卯の花祭り

浜街道に面して北側に大日靈女神社（通称・大日神社）があります。大日神社本殿は、空襲にも焼けずに残りました。神戸高等商船学校の西の海辺にあった川西航空機（現・新明和工業）は、吸い上げポンプで海の砂をくみ上げ急造した埋立地に建造され、帝国海軍が世界に誇る二式水上飛行艇や戦闘機「紫電改」を製造していました。そのためこの地域は米軍のB29爆撃機による爆撃目標となり、広い範囲が爆弾や焼夷弾の被害にあいました。本庄村は昭和二十年五月十一日と六月五日、八月六日に空襲の被害を受け、八月六日には大日神社境内にあったダンジリ倉庫とダンジリを焼失しました。ダンジリ倉庫は白土壁造り、中二階があり江戸時代からのダンジリを解体して保管していました。

大日神社の例大祭は、「卯の花祭り」といいます。卯の花は初夏に咲くウツギの花の別名です。卯は四番目を意味し、月でいえば旧暦の四月です。そのため新暦五月の十九日を宵宮、二十日を本宮として祭りが行われました。この時期は瀬戸内では「魚島時」といって豊漁になる季節とされたそうです。深江の海も冬の漁から夏の漁に変わる区切りの時期だったので。宵宮の十九日は本庄小学校の授業は午前中だけおしまい。二十日の本宮はお休みでした。本家と言われる家には、お嫁に出た娘が孫を連れて帰り、遠くの親戚も

やって来ます。それらの人々を迎える家の嫁は何かと準備に大変でした。

この頃はイチゴの季節でもありました。他所から祭りのために帰ってくる身内は、木箱に入ったイチゴを子どもたちにお土産として持ってきてくれました。イチゴはこの祭り時分だけの「季節の果物」でした。温室栽培などもなく、鳴尾辺りの農家が栽培したものが中心でした。

盆踊り

卯の花祭りに続く大きな行事は盆踊りです。境内に大きな櫓が組まれます。櫓の上にはお手本として小学生が踊り子となって踊ります。三味線太鼓が響き、深江の踊りの先生、黒田浜子さんが太鼓を

打ちました。

この三味線、太鼓に合わせて「深江音頭」や「深江小唄」が唄われました。作られたのは、昭和二十一年とも二十三、四年とも言われます。とくに深江音頭には戦災復興の願い希望が込められています。いずれも黒田清一さんが作曲、細野寛一さんが作詞、細野光子さんの三味線、黒田浜子さんの踊り振り付けで披露されました。

復興祭りとミス本庄

昭和二十五年十月に合併し、その月に神戸市の「みなと祭り」にあわせて「復興祭り」が神社を中心に挙行されました。ダンジリや神輿、鉦や太鼓は卯の花祭りにつき物ですが、このときの復興祭りには「ミス本庄」を選ぶイベントが行われました。「みなと祭り」

深江音頭

- | | |
|---|---|
| 1 深江よいとこ 潮風受けて ヨイヨイ 今日も出船か 勢ぞろひ 沖にや網船 ポンボ船 大漁大漁で戻り船 アリアサットサット 戻り船 | 4 深江よいとこ ちぬの海 ヨイヨイ 恋の散歩も 白浜ふんで 沖のかもめや 浜千鳥 甘いささやき 波の上 アリアサットサット 波の上 |
| 2 深江よいとこ そよ風受けて ヨイヨイ 六甲降りれば 復興町 軒並みそろへて 大繁昌 栄え栄えて 明けて行く アリアサットサット 明けて行く | 5 深江よいとこ 朝日を受けて ヨイヨイ 今日も工場で 槌の音 稲も豊作 黄金波 皆んな笑顔で暮れて行く アリアサットサット 暮れて行く |
| 3 深江よいとこ 六甲のおろし ヨイヨイ 高い高橋 踊り松 卯の花祭の お神輿を 浜の戎さんが 手で招く アリアサットサット 手で招く | 6 深江よいとこ 復興は進む ヨイヨイ 踊り踊れば 彼(あ)の娘は唄う 歌え踊れや 朗らかに 手並みそろえて深江音頭 アリアサットサット 深江音頭 |

深江小唄

- | |
|---|
| 1 深江名所は踊松 高い高橋 片葉草 卯の花祭りの伊達姿 末は鶴亀 五葉の松 澄んだ青空 磯の松 波はさざ波 白帆が見ゆる 粋な姉さんの艶姿 にっこり笑えば 片えくぼ 今日は東風(こちかぜ) 出舟の支度 向ふ鉢巻 玉の汗 エンサエンサの勇み肌 続く大漁で 大賑 白い砂浜 恋の夜 好いた同士の忍び逢い 彼(あ)の乙女(こ)の姿が浜千鳥 何に啼くのか 帰り雁 |
|---|

で「ミス神戸」が選ばれていましたから、それにならったのかもかもしれません。「ミス本庄」も「準ミス」も深江から選ばれ、オープンカーならぬトラックの荷台に載って、深江の町をパレードしました。復興祭り以後は「ミス本庄」を選んだりした話は聞きません。復興祭りに限ったイベントだったように思います。

また「復興祭り」では「渡部のおじさん」の太鼓が人気を呼びました。このおじさんは「帽子屋のおっちゃん」とも呼ばれ、胸まで伸ばしたヒゲがトレードマークでした。そのおじさん、派手な身振りで太鼓を打ち鳴らします。太鼓の響きもさることながら、その身振り手振りに観衆はやんやの喝采でした。商船学校の学生の仮装行列もあつたように記憶しています。

稲荷筋

大日神社境内の西側、深江を南北に通る道が「稲荷筋」です。この道は、阪神電車深江駅から国道2号線、森の稲荷神社の赤鳥居を過ぎてJRの鉄道ガードに至ります。赤鳥居は、戦時中B29がこの地区を空襲するとき目印としたと言われます。大きな建物もないあの時分には、上空から見ればひときわ目立つ建造物だったのです。稲荷神社は森、深江、青木の三か村共通の氏神様です。卯の花祭りには、この稲荷神社から神様が担ぎ番に当たる地区の若衆に担がれて大日神社のお旅所まで渡御されました。稲荷筋は、森の稲荷神社から神様が深江のお旅所まで渡御される道筋でした。それが稲荷筋の名前の由来です。お旅所は昭和四十三年、深江会館建築の後になくなりました。

魚屋道

深江には有馬への魚屋道があります。「ととやみち」と呼び「と」とは魚のことです。深江の浜は地引網の盛んな所でした。深江の浜で捕れた大きな魚や和歌山辺りからポンポン船で運ばれた魚が市

場で売り買いされ、生簀もありました。深江の人は大きな魚を天秤棒で担ぎ、六甲の山道を伝って有馬の温泉街に売りに行きました。生の魚だけでなく乾物のイリコも売りに行きました。深江のイリコは大正時代から宮内庁に献上して、深江の浜の名産になりました。

余談ながら、「魚屋道」の碑は初め深江駅北西の銀行の前に建立され、現在は大日神社前に移されています。いかにも稲荷筋が魚屋道のように思われがちですが、これはより多くの人の目に留まることを願って石碑を建てたままで、本当の魚屋道は札場通りでした。江戸時代の地図を見ても、札場通りが漁師町の中心で、昔から札場通りの浜先で魚の水揚げ、取引がされていました。札場通りを北に向かい、国道2号線を越えてから西に斜めに向かう稲荷神社参拝道があり、稲荷神社の西を抜けて六甲の山越えをするのが正規の魚屋道です。

深江駅南の店舗と銀幕スター

深江駅南に面して、西端に「深江書店」がありました。

本庄村には、神戸高等商船学校があり、深江書店では海事専門書が多くおかれていました。もちろん本庄小学校や中学もありましたから児童書などもそろえていました。

本屋の東に「百万ドルのエクボ」と言われた映画スター乙羽信子の家、加治家がありました。乙羽信子は鳥取県米子で生まれ幼い時に、饅頭を扱う加治家の養女になりました。彼女は近くに住んでいた同じく宝塚のスター、葦原邦子の誘いで宝塚歌劇団に入り、映画界へ移りました。「銀幕のスター」は「深江の輝く星」として、今でも深江の人の誇りです。

隣には「氷販売店」がありました。「一貫目」と注文すれば、五分か一寸もありそうな鋭い刃が並んだ大きなノコギリで切り分けてくれました。

深江銀座通りの商店

「稲荷筋が阪神深江駅を南に越えて「新道」と合流するあたりまでを町の一番の繁華街という意味で「深江銀座通り」と呼びました。東側の札場通りにも店舗が点在していましたが、それらはどちらとも言え、日常の身の回り品などを扱う「近所の店」と言う印象です。昭和二十九年に深江駅の北の稲荷筋沿い西側に「稲荷市場」が出来るまでは、この通りが町一番の繁華街でした。

氷店に並んで「のんきや」というパン店がありました（写真1、2）。「のんきや」の隣に寿司屋、続いて喫茶店がありました。この喫茶店は「のんきや」と親戚の方の経営です。終戦後間もない頃、コーヒーや紅茶はぜいたく品でなかなか手に入らず、この店も外国人の知り合いを通して仕入れていたそうです。

続いて三代続いた「木下理髪店」、辻を南に渡って「麻雀店」がありました。この麻雀店は深江にあった最初の麻雀店です。麻雀卓が五、六卓ほどのこの種の店としてはこじんまりしたものでした。

南隣が「井上洋品店」（写真3右側）。全体の印象は明るいモダンな感じの店でした。店内北側は全面ガラス張りのショーウィンドーになっています。中央にもふんだんにガラスを使って商品を見やすくしていました。主力商品はワイシャツなどの男性用だったようです。

洋品店の横が八百屋と呼ばれた「永田食料品店」（写真3中央）。扱う商品は今の時代と変わらないけれど、包装は全て新聞紙でした。一軒はさんで履物店。人々の日常の履物は下駄と靴が半々か、どちらかと言えば下駄の方が多かった気がします。学校へ行くのも下駄履きの子もがいました。下駄の鼻緒は家庭でも修理でできましたが、下駄の歯が磨り減れば履物やで直してもらいました。

多田ラジオ店と街頭テレビ

深江銀座通りという呼び方は、昭和三十年代になるころには殆どが消えてしまいました。当時からあって阪神・淡路大震災後も営業していた店が「多田ラジオ（電気）店」（表紙写真、写真4、5）です。

テレビが放映されるまでの電気商品の主力は「電球」です。この頃の電球はよく切れました。家庭での家電製品の代表は○球スーパーというラジオです。○球というのは真空管の数です。この真空管もよく切れたそうで、その取り替えも電気店の仕事でした。

当時の最大の娯楽は映画です。映画とラジオが合体したようなテレビの出現は驚きをもって人々に迎えられました。しかし、テレビは全くの高級品で、昭和二十八年の白黒テレビの値段は一七五〇〇〇円でした。公務員の初任給が八七〇〇円の時代です。庶民にとってテレビの出現は街頭テレビが始まります。プロレス、力道山が人気を呼び、プロレス中継の時間、街頭テレビの前は日本中どこでも黒山の人だかりになりました。深江の多田ラジオ店も例外ではありません。ショーウィンドーのガラスが三度割れたと伝わっています。ガラスがこれ以上割れるのは困ると、テレビを大日神社境内のお旅所（写真6）の上に置いたといえます。まるで野外映画館で、観客が大日神社の南の浜街道にまであふれる有様でした。少年は力道山見たさに夕食もそこそこに家を飛び出して、お旅所の前に座って放送を待ったものです。またラジオ店には当時正月にまとまって電気器具が入荷する初荷がありました。メーカーの法被を着た社員たちが持ち込み、店頭は電化製品で山積みになりました。

銀座通りの「ぎんざや」

多田ラジオ店の隣は「丸岡靴店」。大人の履く靴は革底でした。下駄の歯の直しがあつたように靴の革の張り替えが多かったのです。



図 昭和20年代前半の深江駅前の町並み
 (深江塾・大西令子さんが作成した原図に山口咲子さんらメンバーが修正した)



写真2 のんきやと深江書店看板(同)



写真1 のんきやの昭和30年代前半の店頭
 (大西令子さん収集、山口咲子さん提供)



写真6 大日霊女神社境内にあったお旅所
(当館所蔵)



写真3 井上洋品店（樹木の向う側）と永田食料品
店（写真中央）昭和30年代半ばと推定
(大西令子さん収集、多田康治さん提供)

写真7
(大西令子さん収集、多田康治さん提供)



写真4 昭和30年前後ごろの多田ラジオ店。看板に
洗濯機が描かれている（同）



写真8 昭和40年代半ばのぎんざや。右は丸岡靴店。
交通整理をするのは丸岡増次郎氏
(大西令子さん収集、丸岡良一さん提供)



写真5 「初荷」が入荷し賑わう昭和30年代半ばの
多田ラジオ店。看板にテレビが描かれてい
る（同）

西国浜街道と深江銀座通りが交差する北角に「ぎんざや」(写真7、8)がありました。その看板はひととき大きく目立ちました。食堂であり喫茶店でありパン販売もしていました。店内にテレビが置いてあり、テレビ放送を見るために入店する人も多く、子どもたちはガラス越しに覗き見していました。テレビはこの「ぎんざや」レストランにとっては集客の貴重なツールでした。

「ぎんざや」で人々の印象に残るのは蛍光灯です。店の照明といえども白熱球が多かった時に、昼間と変わらない色でモノを見せる蛍光灯の明るさに、人々は目をみはりました。

本庄村立建物と店舗

浜街道を南に渡った角の郵便局に並んで本庄村立の連棟式二階建ての建物がありました。二階建てでしたが普通の住宅より少し棟が高かった印象があります。この建物一階が店舗で「ポンプ屋」がありました。昭和二十年代には水道はまだ一般家庭には来ておらず、井戸を利用していました。井戸からの水の汲み上げは、釣瓶が多かったのですが徐々にポンプが普及し、釣瓶と共存していました。ポンプはモーター利用ではなく手動で取っ手を上下に動かして汲み上げるものです。汲み上げた水は大きなカメ(史料館に保存展示)に入れて、使用のたびに柄杓で必要な分だけ汲んでいました。ポンプ設置や修理と言う仕事を生業とするのが「ポンプ屋」です。

銀座通りは商店が多くありましたから、銀座通りの「ハシダ文具店」は学童用文具のほか、いわゆるオフィス用品をそろえています。「ハシダ」は後に印刷業へとその主力業務を拡大変更され、店舗の場所も変わり、高橋川東の浜街道沿いに移りました。

深江には大学から幼稚園までそろっていて文具の需要は少なくなく、本庄小学校の裏門に金星堂、南側の正門にもう一店ありました。文具だけでなく、児童の趣味的な遊び道具小物、例えば竹ひこで作

りゴム動力で飛ばす模型飛行機などもありました。

なお戦前には街道に面して学校の東側に別に三角文具店がありました。深江財産区管理会の志井保治会長と同級生だった店主が病没され、閉店しました。後に遺族が小学校に多額の寄付をされ「三角基金」として活用されています。

深江銀座通りの東筋

深江銀座通りの東側は、復興計画に基づいて拡幅工事が行われませんでした。通りの北半分を占めていた大日神社もこのときにその敷地をずいぶん道路として提供しました。

大日神社から浜街道を南に渡ったところに、パチンコ屋がありました。パチンコ台が壁に沿って二列に並んだ程度のことじまりした店です。換気もよくなかったのかタバコの煙がいっぱいであった印象があります。

銀座通りに沿ってパチンコ屋の南に「松尾酒米穀店」。米や麦、各種酒、醤油、酢、油など日常生活に欠かせない食料品を扱っています。この店は精米もしていました。その頃は米や麦は台秤で量り売りが普通でした。酒や油や酢も一升ビンなどでも売っていました。サイフォンで吸い上げての量り売りがけっこう多かったのです。この頃、客はビン持参です。近所の子どもがお使いで夕方にビンを持って酒を買いにやらされることもありました。「子狸が徳利もって酒買いにやね」と言う面白い言葉も聞きました。辞書では「灘では子狸が酒蔵に住まないと、よい酒は出来ないといわれた」と記されています。灘の酒蔵のある海辺には松の林など自然も多く、狐や狸が蔵に住み着いたとしても不思議ではありません。深江にも幾つかの酒蔵がありました。

牛舎と牧場

深江銀座通りが尽きる南の端の二階に歯科医院がありました。医

院の一階は牛舎があり牛のにおいに満ちていました。銀座と医院と牛舎と言う不思議な取り合わせです。国道43号線は都市計画決定から着工まで、およそ十数年かかりました。着工まで用地はあちこちが広っぱとなっていました。深江銀座通りの南にも道路用地になる前には牧場がありました。南北五〇畝、東西一〇〇畝ほどであったでしょう。この牧場では、牛たちがのんびり日を浴びて寝そべったり草を食んだりしていました。「内海の牧場」と呼ばれていました。寝そべっている牛の尻尾に触っていたずらをした「悪ガキ」たちに、牛が怒って立ち上がったそうです。

この牛舎で子牛が生まれたとき近所の人には、その子牛がオスカメスカすぐに分かったそうです。大人の牛のなき声で分かるのです。オスカの子牛は生後十日の経たないうちにどこかに売られていきます。子牛を引き離された母牛は声を上げます。母牛だけではありません。一緒にいる牛たちがみんな声を上げるのです。人間にもその牛たちの声が、悲痛な泣き声である事は分かったと言います。その牛たちの声を聞く子どもたちは、子ども心に「命」とか「親子の絆」とかを言葉ではなく肌で感じたのです。

終わりに

昭和二十年からの十年間は、わが国にとって歴史上まれに見る激動の時代でした。それはこの深江の町にとっても例外ではありません。あれから六十年余の歳月が過ぎました。深江の長い歴史から見れば、六十余年前は「ちよっと昔」のことかもしれませぬ。一方で、そのちよっと昔のことも、実際に見聞きし体験しかつそれを語れる人は、年々少なくなってきました。あらためて記録することの大切さを痛感します。

この文章は、メンバーで語りあったことや筆者の記憶を下敷きに、筆者の責任で文章にし、メンバーや志井保治会長にも見ていただき

修正を加えました。記憶違いもあるかも知れませぬ。誤りがあれば指摘していただきたいと思えます。今後ともテーマを変えて記憶の掘り起こしと記録を続けていきたいと思えます。ご協力お願ひします。



多田ラジオ店を経営していた多田正市氏、多田康治氏、元丸岡靴店の丸岡良一氏にも協力を得て、写真の年代特定をし、一部修正を加えました。多田ラジオ店の看板は、写真4は洗濯機が描かれています。写真5になるとテレビに変わり、わずかな時期に電化製品への憧れが変わり、それが看板にまで敏感に反映しています。また昭和四十年代になると、ぎんざの看板も様変わりし、コカ・コーラの広告が入ります。ここにも生活文化の変化が読み取れます。

なお原稿化に先立って意見を交わした深江塾のメンバーは、筆者の森口氏のほか、飯田一雄、植田延生、大西令子、寺田喜多子、西土井敏、島信也、藤本吉江、増田行雄、三枝照於、山口咲子、吉田修三の各氏と史料館の道谷副館長、水口研究員と史料館長です。協力いただいた方に、末筆ながら厚く感謝いたします(大國正美)。

東灘区区制六〇周年写真展に協力

甲南本通商店街振興組合が商店街の空き店舗を使い、二〇一〇年七月、東灘区区制施行六十周年を記念パネル展「東灘のあゆみ」を開き、史料館も神戸高等商船学校の写真を貸し出すなど協力した。展示コンセプトの提案や、資料写真を検索するなど、最初から企画にかかわった。展示は一九三八年の阪神大水害の写真や新聞記事のパネル、東灘区の航空写真記事など約三〇点を展示した。

(大國正美)

打出焼と精道村尚歯会

史料館研究員 藤川 祐 作

二〇〇八年夏に発掘調査がおこなわれた芦屋市呉川町呉川遺跡二二地点で、明治末から昭和初期にかけての食器、生活道具などが大量に出土した。食器類は陶磁器で「ノリタケ」をはじめ高級洋食器が出土し、その中に「打出焼」破片五点が報告されている。

この一帯は、一九八八（昭和六三）年に発見された徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群から下された船積み前の石材集石場である。今日まで五ヶ所から計一九石の石材が発見され、それぞれ保存、活用されている。さらに宮川川床には干潮時の折、数石の石材を見ることができるといえる。

今回の現場の東、北海道路が拡張される際、道路と平行して流れる大溝川が暗渠化され、旧川床からも「打出焼」一〇数点が出土している。

出土した五点の内訳は、皿一点、碗二点、小鉢一点、徳利一点。この徳利に「精道村 尚歯会」と記されている。コバルトブルーの半磁に近いもので、全体のはば二分の一、下部のみで現高五センチメートル、底部の直径四・七センチメートルで、隠し高台で「精道村 尚歯会」と二行に記され、行間最下部にひらがなで「うちで」（一・一センチメートル×〇・六センチメートル）と印されている。「精道村 尚歯会」について述べる前に、「尚歯会」について先に触れてみる。

一九一一年（明治四四）年に文部省に「通俗教育調査委員会」が設けられた。「通俗教育」とは、一般に誰にでもわかりやすく教育す



▲出土した打出焼徳利

ること、今日の社会教育にあたる。道徳、体育などを推し進めると共に、知的認識能力、思考能力を高めることも教育し、社会福祉も追い求めた。

一九九〇（明治二三）年に発布された「教育勅語」に続くもので、日露戦争（一九〇四―一九〇五）、一九一〇（明治四三）年に起きた明治天皇暗殺を企て

たとされる大逆事件など当時の動揺する社会を背景に、国民一丸となることを目指し種々の政策を実行した。その中の一つとして、高齢者すなわち老人を尊敬し大切にすることを事業として、「尚歯会」が地域ごとに設立されたものと思われる。「歯」とは年齢をさし、「尚」とは老人への尊敬を意味する。

『武庫郡誌』（一九二二―大正一〇）年を見ると、良元村（宝塚市）、住吉村（神戸市）、御影町（神戸市）は一九一一年（明治四四）年に設立されており、良元村では、本村教育会主催で、七〇歳以上の高齢者が招待され、茶会、児童の学芸会などで一日を過ごした。

住吉村では、同年二月二三日に七〇歳以上の高齢者を招いた慰安の一日を過ごした。毎年出席者は八〇人から一〇〇人を数えた。

御影村では、はじめ御影尋常小学校主催だったが、一九一七（大正六）年からは御影町の主催にかわっている。七〇歳以上の高齢者を招待し、幼稚園児、小学校児童などが演じた。一九三三（昭和八）年からは御影公会堂に場所を移している。この時の必要経費は町費、寄

付金があてられ、清酒などの寄付もあった。

次に西灘村では、一九一三（大正二）年一〇月に同村教育会が開催、村の補助金と有志の寄付でまかなった。

地元本庄村では一九一五（大正四）年一〇月二〇日に村長深山廣三郎により開催され、七〇歳以上の七八名が出席した。

以上がこの地域での「尚齒会」の活動の一端である。ただ大正二～四年と開催が遅れた原因については、目下のところなぜか不明である。

前述したように各地域ごとの「尚齒会」がいつまで続いたのかははっきりしないが、おそらく太平洋戦争勃発など、戦時色が濃くなつた頃に途絶えたのではない。いくら高齢者を大切にという気運があつても戦地へ働き盛りの若者を送り出したり、勉学に励む学生を学徒動員したりする中、祝い事どころではなかったのではないかと推測している。

さて、精道村については目下のところ記録を確認していない。精道村はそれまでの三条、津知、芦屋、打出四村が一八八九（明治二二）年に精道村となり、一九四〇（昭和一五）年に町制から芦屋市制へ移行した。

精道村においても前述した各村の設立から推測して、一九一一（明治四四）年から一九一五（大正四）年の間と考えてさしつかえはないであろう。その折設立記念品として参列者に配られたのである。明治四四年と言えば、打出焼初代坂口砂山が楠町の斎藤幾多のお庭窯を引き継いで春日町で開窯した直後の作品と思われる。

精道村から芦屋市へ至るまでの「尚齒会」についての記録はなく、当市において「尚齒会」について知る市民もすべて故人である。

戦後芦屋市における老人会の活躍を調べてみると、一九五五（昭和三〇）年代、市内在住の画家青木氏がサークル風の老人クラブを

結成し、一九五七（昭和三二）年に親玉塚町の倉本氏が、一九五八

（昭和三三）年には大原町の天羽氏と福田貞治氏、一九六二（昭和三七）年には楠町の小林董次郎氏が各町で老人会を結成し、一九六三（昭和三八）年、老人福祉法の成立を前に、六月一三日、各町の老人会を「芦屋市老人クラブ連合会」とし、今日、市内には五一クラブの老人による多種多様な活動がおこなわれている。

今回の小稿執筆にあたり、芦屋市教育委員会の学芸員四氏には快く了解をいただきました。また多くの関係者にお世話をおかけしました。本来ならご芳名を記するところ紙面の都合上、失礼ながら割愛させていただきます。

参考・引用文献

- 「文化財特集 考古学が解き明かす芦屋」『広報あしや』一〇〇一—二〇〇八年十二月
藤川祐作「六甲山系の徳川大坂城採石場と積み出し地」『歴史と神戸』一六八 一九九一年一〇月
白谷朋世「打出焼」『のじぎく文化財だより』四一 一九九五年八月
亀山昌也メモ
吉川正通「明治末期「通俗教育調査委員会」制度の一考察―社会教育観と社会福祉観―」大阪府立大学社会福祉学部『社会問題研究』一九七九年一〇月、二九卷三号

神戸深江生活文化史料館が創立三〇年

神戸深江生活文化史料館は、一九八一年二月二十一日、神戸・深江生活文化史料室としてオープン、今年で満三〇年を迎えました。財産区管理会のご理解と地域の方々の支えでここまで到達しました。今後も地域と連携し、研究と普及活動を続けたいと思います。

深江の青年団と夜学会

史料館館長 大 国 正 美

大日靈女神社境内で撮影された一枚の写真がある。「深江青年夜学会創立記念」という看板らしきものが見える。夜学会とは明治時代から各地で作られた青年団の自主的な学習会が発端だとされる。

明治時代は、家業重視や教育に対する理解度の低さなどがあって教育を受けられない若者が少なくなかった。このため江戸時代以来の若者仲間が土台になって、夜学会が自主的に運営され、農村部では、昼間の農作業の時間帯を避けて学習の場を設けた。また日清戦争（一八九四～九五年）、日露戦争（一九〇四～〇五年）では国内での「銃後の活動」が重視され、夜学会は行政により政策的に推進され、飛躍的に拡大した。民間の学習活動というより軍事教育や愛国教育に重きが置かれたという。明治末期から大正年間にかけて初等教育を補完する実業補習学校が普及すると、役割を終えていった。

深江での青年団については、大正十年（一九二一）発行の『武庫郡誌』によれば、長く中絶していた後、大正九年五月、深江駐在所巡査佐々見九一と篤志家岡部貞一郎が再興、深江在住の十五歳から三十五歳の男子を網羅、団員は四七〇人に及んだという。会長・副会長各一人、幹事三十四人を置いた。別に尋常科五年以上の小学校在校生を対象にした少年団もあった。毎夜夜学会を開き、精神修養と学科補習を行った。その数約七〇人で経費は篤志家の拠出により、熱心な指導が行われたとある。大正後半になっての盛会ぶりや行政からは独立した運営など、通常知られた夜学会とはかなり様相が異なっている。夜学会については『武庫郡誌』では武庫郡全体として

は「甚だ盛んならず」とあるから深江での盛会ぶりが突出している。その背景にあるのは岡部貞一郎という人物にあるだろう。岡部は明治二十三年（一八九〇）大阪に生まれ、大阪高等商業学校を卒業、大阪株式取引所などに勤務、深江に移住して青年団活動や村会議員などを経て、昭和六年（一九三一）には県会議員に当選した。

さてこの写真であるが、大正九年の青年団再興の時の写真と思いがちだがそうではない。後列左から三人目に写っている十代前半の少年は大正八年生まれの永田清治氏であるからである。年齢からすれば昭和一けたの写真だろう。写真に「深江青年夜学会創立記念」とあるのは、何周年かの記念行事だろうか。七〇人という盛時の人数からみれば一九



昭和前期の深江青年団主催の夜学会（大日靈女神社境内）
＝永田清治氏の弟、勇雄氏提供

人と少なくなっているが、この時期まで継続していたことを示し、また神社境内に大きな松があったことなど、当時の景観がうかがえる貴重な写真である。

なお永田清治氏は昭和十五年軍隊に召集され、同十八年ニューギニア沖で戦死し、帰らぬ人となった。

史料館入館者七万人達成！

一九八一年開館から三〇周年を迎え、二〇一二年二月二十五日（火）に史料館の入館者が七万人に達しました。七万人目の入館者は、神戸市立荒田小学校三年生のみなさん（二四名）です。当日、道谷副館長より「来館七万人の証」と記念品を贈呈しました。



▲「来館七万人の証」授与



◀「来館七万人の証」

▼館内を見学する小学生のみなさん



▼大日神社境内での集合写真



「史料館だより」の電子公開

史料館研究員 高田 祐一

博物館の機能として①資料の収集、②保管分類、③調査研究、④教育普及がある。当館で発行している『生活文化史』（以下、史料館だより）は、調査研究の成果を公開・普及させるものであり、「史料館だより」を広く読んでもらうことは、当館の活動成果を地域に還元することにつながる。広く読んでもらう施策として、史料館だよりの電子公開を実施した。

電子化自体については、二〇一〇年二月に行い、その概要を『史料館だより』三八号にて報告した。続いて二〇一一年一月に当館ホームページにて公開した。公開前には、電子化ファイルをOCR認識にかけ、文字列検索できるようにした。

今後の課題として、利便性の向上を図る必要がある。利用者がそれぞれの興味のある報告にたどり着けるようにしなければならない。そのためには、たとえば過去の分の史料館だよりを一括で文字列検索

索をできるようにする

る、などである。また

意識していないかつ

たテーマに興味を持つ

てもらおう仕掛けも必

要だらう。今後も継

続的に効果的な仕組

みを模索する必要が

あるだろう。



▲史料館だより創刊号 1981. 4. 1

資料登録カードとデータベースの連携

— 兵庫県ヘリテージマネージャー養成講習会での公開 —

史料館研究員 水口千里

当館では二〇一〇年度に資料登録カードを刷新した。その目的のひとつにデータベースの構築に利便性の高い項目設定をすることがあった（『史料館だより』三三八号参照）。完成後、新着資料の登録が始まりながら作業時間が取れず、データベースの構築にはなかなか着手できなかった。しかし、今年度初めに筆者が「兵庫県ヘリテージマネージャー養成講習会」の「有形民俗文化財の登録票の作成」の講師の依頼を受けた。講習日まで半年近い期間があることに加えて会場が当館と決定したため、これを機会に資料の一部のデータベース化を試み、講習で公開することにした。

当館のデータベースの作成は、高田研究員が担当している。筆者は、開館時に受け入れた資料の記述内容を、設定した項目に置き換え

データベースの基本となるエクセルファイル作成をおこなった。

それ以降の完成までの作業内容などについては後掲の高田報告を参照されたい。



▲講習会風景

註(1) 兵庫県教育委員会は、二〇一〇年度に歴史文化遺産を発見し、保存し、まちづくりに参画できる能力を有する人材を養成するため、有形民俗文化財の分野に関し、「兵庫県ヘリテージマネージャー（歴史文化遺産活用推進員）養成講習会」を開催した。

資料登録カードのデータベース化

史料館研究員 高田 祐一

当館は、資料を収集し、保管分類を行っている。保管分類するために、資料受入時に情報を資料登録カードに記入している。このカードによってモノ（資料）と付帯情報（寄贈者やヒアリング情報）を紐付けることができ、調査研究に活用することができる。館の重要な情報基盤といえる。

現在、当館では、資料登録カードは紙のカードである。しかし、紙のカードでは、資料情報の高度利用や情報の経年劣化を防ぐことが難しい。ある特定の資料情報を集計したりするには、手作業だと膨大な時間がかかる。寄贈者の住所など重複データについては、整合性を確保し続けるのは難しい。資料の保存状態の変化や保管場所の変更等、常にカードをメンテナンスしなければ、経年劣化を起し、使えない情報の墓場となり、情報基盤としては成立しない。

これらの問題を解決するために、資料カードのデータベース化を行うことにした。データベース化を行うために、資料カードのデータモデリングを行った。データモデリングとは、データの関係性を分析し、可視化することである。このデータモデリングの手順と実践については、ヘリテージマネージャー養成講習会で報告し、データベースのプロトタイプを公開した。今後は、水口研究員が入力しているデータをデータベースに流し込み、実運用にむけて仕上げを行う予定である。将来的には、データベースを外部公開し、一般の方も利用できるようにしたい。

トライやる・ウィークと史料館

——本庄中学校の生徒を受け入れて——

史料館研究員 水口千里

二〇一〇年度トライやる・ウィークは、史料館では六月三日、四日の二日間本庄中学校の二年生を受け入れた。今回体験をしたのは、学校の作業学習で学んでいる陶芸の作品づくりに一生命取り組んでいる池田伊織さんと、サッカー部に所属してリフティングが得意だという岡村拓馬くんの二人である。

一日目は、博物館での実務の内容を理解し、体験することに重点をおいた。まず資料の収集と整理に関するDVDを見て、博物館での資料の取り扱い方法などを学んだ。理解を深めたあと、史料館の展示を見ながらどんな展示物があるのか概要を知り、興味がある資料を何点か撮影した。その中から資料を選び資料整理の基本である資料登録カードの作成に着手した。池田くんは水がめ、岡村くんは紙幣とそれぞれ好きな資料を選んで撮影し、資料カードにプリントアウトした写真を貼り、資料情報を記入して完成させた。また事務処理の体験として、当館が毎年発行している『史料館だより』（本誌）を関連機関に発送するために、三つ折りにし、封筒に宛名シールを貼って封筒詰め作業をおこなった。慣れない作業だったせい



▲池田伊織くん

岡村拓馬くん▼



か、『史料館だより』を三つ折りにするのはかなり苦労したようだった。

二日目は、季節の展示コーナーの五月人形を収蔵庫に収めたあと、『夏の風物詩』というタイトルで展示プランを考え、実際の展示を体験した。最初からやり方などを示さず、使用資料だけを渡して自由な発想で展示してもらった。展示資料にはガラス製のハエ取り器や夏用のおひつなど初めて見る道具もあるので、それらについては使用方法を学習し理解した上で、二人で話し合い協力して展示をするという作業に熱心に取り組んでくれた。感想文によると、この展示がもっとも興味深い作業だったようである。そのあと、小学生のための展示用として、かまど、流し、水がめ、ちゃぶ台、火鉢などが描かれているむかしの道具のイラストを渡し、彩色をして道具についての説明文を小学生にもわかりやすく書いてもらった。ひとつひとつの仕事をとっても丁寧におこなっているのがこちらにもよく伝わってきた。

わずか二日間の体験ではあるが、二人にとって地域の歴史に関心を持つ機会となり、またこの一文が二人が頑張った活動の記録のひとつになればと館員一同願っている。



上 季節展示『夏の風物詩』
下 資料登録カードの作成

史料館日誌抄

史料館副館長

道谷

卓

二〇一〇年四月以降

△二〇一〇年▽

5月15日 甲南大学文学部

(見学者 二八名)

6月3日 / トライやる・ウィーク・本庄中学校二年生二名を受け

4日 入れ、二日間史料館業務の体験。

6月7日 歴史資料ネットワーク講演会

(参加者 八〇名・於 深江会館)

6月26日 大阪市立大学文学部

(見学者 四二名)

7月15日 東灘区役所職員研修

(見学者 二六名)

10月3日 兵庫県教育委員会ヘリテージマネージャー養成講座

(見学者 一五名)

11月16日 大手前大学博物館実習履修生

(見学者 二五名)

12月17日 福住小学校 三年生

(見学者 八三名)

△二〇一一年▽

1月18日 摩耶小学校 三年生

(見学者 六一名)

1月21日 本山第三小学校 三年生

(見学者 一二七名)

1月25日 福池小学校 三年生

(見学者 一三八名)

1月27日 水木小学校 三年生

(見学者 五九名)

1月31日 六甲アイランド小学校 三年生

(見学者 九八名)

2月1日 灘小学校 三年生

(見学者 六二名)

2月3日 本山第二小学校 三年生

(見学者 一〇六名)

2月4日 本山第二小学校 三年生

(見学者 一四三名)

2月7日 向洋小学校 三年生

(見学者 九四名)

2月8日 東灘小学校 三年生

(見学者 六八名)

2月8日 湊小学校 三年生

(見学者 八三名)

宮本小学校 三年生

(見学者 四二名)

2月10日 御影小学校 三年生

(見学者 一〇九名)

2月14日 東灘小学校 三年生

(見学者 一〇名)

2月15日 碑田小学校 三年生

(見学者 九九名)

2月15日 荒田小学校 三年生

(見学者 二七名)

Ⅱ 入館者数七万人突破Ⅱ

2月17日 本庄小学校 三年生

(見学者 三二名)

2月17日 兵庫大開小学校 三年生

(見学者 一五六名)

2月18日 魚崎小学校 三年生

(見学者 二二一名)

2月21日 本庄小学校 三年生

(見学者 六四名)

資料寄贈者ご芳名

(敬称略・二〇一〇年四月)以降

小川良太/森澤達夫/富永喜代子/山本 勇/松原浩二

(藤川祐作記)

編集後記

地域の方々と始めた「深江塾」で昭和二十年代の深江駅前の風景を再現、記録しました。「本庄村史」は現代史の記述が不十分で、住民のみなさんの記憶が確かなうちに記録化しようという試みです。とはいえ記憶だけに、確かな事実は何かと、四苦八苦しました。とりあえずの成果として公開します。ご意見や感想をお待ちしています。

『生活文化史』 第39号 2011・3・31

編集/大国正美・水口千里

発行/神戸深江生活文化史料館

〒658-0021 神戸市東灘区深江本町3-5-17

☎ 078-453-4980 (FAX兼用)

http://homepage2.nifty.com/fukae-museum/